

漢字の学びかたの再提案—障害のある子どもたちの漢字学習探索の視角から

松崎良美（東洋大学 社会学部 助教）

背景

日本語は、「ひらがな」「カタカナ」「アルファベット」そして「漢字」と、さまざまな表記形態の選択肢を持ち、その記載の仕方を通じて自身の思想的立場や考えを盛り込むことができる言語だ。しかし、「当たり前のように」学ばれ用いられていくと思われている日本語の習得・活用は、必ずしも日本社会の誰にとっても「当たり前」にはならない。例えば、目の見えない人や耳の聞こえない人にとっても、じしんの考えや思いを伝えようとする場面では、日本語表記を駆使する必要性に迫られることは多々あるが、その学びには一定の努力を要することになる。「見た通り」に書き写したり、何度も音読するような学び方ではなく、「漢字を理屈で考え、納得して学ぶ方法」を、合理的に漢字を学ぶ方法として提案したいと考えた。

目的

本研究では、特に「漢字」に着目し、さまざまな特性のある子どもたちの「漢字を学ぶ関心」を引き出し、その子どもたちじしんが自由に漢字への興味や関心を広げていくことができるような教材として、(1) 漢字の持つ世界観にふれる動画のオンラインコンテンツや、「さわって学ぶことのできる教材」の考案・開発を行うこと、(2) 実際に障害のある子どもたちの漢字学習を質的に観察し、新たに提案する漢字の学び方の実証的な検討を行うことを目指した。

方法

漢字の新しい学び方の提案として、(1) 「漢字料理」というコンセプトを用いた教材の開発と、(2) 実際の授業実践を進めた。(1) と (2) は、同時並行的に実践され、子どもたちからのフィードバックを反映しながら、教材の開発・改良に取り組んだ。

(1) 「漢字料理」というコンセプト

料理は、さまざまな味や歯ごたえを持つ素材を組み合わせ調理していくプロセスのことを指すが、漢字も、実は、それぞれの意味や読み方をする漢字のパーツ／部首を組み合わせ構成されている。まさに、漢字がなぜこのような形をとるのか、このような読み方をするのか、という“理屈”を、漢字がどのような素材／部首で構成されているのかを分解して考えていくようなアプローチをとる学び方を「漢字料理」とし、そのコンセプトを反映した漢字学習の教材を開発した。

- a. 漢字学習のための動画教材
- b. 漢字料理一覧集と、ラミネート版の漢字料理教材
- c. 触って学ぶことのできる 3D ブロック教材



(2) 遠隔会議システムを用いた家庭学習支援の中での漢字学習実践

障害や事情があって学びにくさを抱えた 9 名の子どもたちを対象に、2 週間に 1 回・毎回約 60 分程度の家庭学習支援を継続的に持ち、その中で新しい漢字学習の提案の実践、実証的な検討を行った。

結果・考察

漢字料理のコンセプトを用いた漢字学習の実践とは、いわば、つくりたい漢字／漢字料理のために、適切に素材／部首を選び取り、組み合わせ、適切に盛り付けていくというプロセスであり、「なぜ、そのように組み合わせるのか」、「なぜこの部首／素材なのか」という“理屈”にフォーカスしながら漢字を学ぶ試みだ。漢字ブロックなど、開発した漢字学習教材は、特にその形に注目し、触って、観察することに特化したものであったが、そうした漢字教材に触れることで得られた「漢字の持つ合理性」に対する“気づき”が、その後の漢字への興味や関心、言葉の活用に展開していった。漢字料理というコンセプトや、漢字ブロックという教材は、いわば漢字を楽しく学んでいくうえでの「道具」のようなものであって、その「道具」をうまく活用していくことができるような“リテラシー”と、そうした学びを発展・展開させていくことを許容する“場”が求められていることが、本研究により立証された。ぜひ、社会への提言を企てていきたい。

共同研究者：柴田邦臣（津田塾大学学芸学部）